

北宋前半の本貫取解について

村 田 岳

中国史上に於いて宋代は歴史を動かす担い手がそれまでの貴族から士人層へと移ったことが特徴として挙げられる。ここで言う士人とは儒教的知識に基づく知識人であり、経歴としては宋代より本格化した官僚採用試験である科挙に合格した、乃至はそれを受験したことのある人間であることが多い。だが士人にとって科挙は単なる官僚採用試験に留まらない。科挙に参加し、士人として認められるだけで裁判や役などの方面にての特権も認められる傾向があったからである。そしてこのような傾向は明清期までも継続していたため、末端をも含んで存在していた「科挙社会」を理解することは宋代のみならず、その後の中国史理解にとっても有益なものとなりうる。

このような重要性に基づき、宋代科挙に対する研究は多数存在している。だが、宋代に始まった「科挙社会」を考察する上で重要となってくるのは、士人身分を認められるか否かの分水嶺となる解試という存在である。そして解試制度の中で重要となってくるのが受験地を限定する本貫取解規定である。そもそも科挙とは官僚となるのに相応しい教養と人格を身につけている人間を合格させるもので

あるが、試験のみでは人格までは保証することができない。受験者の人格や資格を、さらには過去に犯罪を犯していないかなども含めてを、郷里の人が保証する制度、それが本貫取解規定であった。また宋代では各州軍ごとに合格定員数である解額が存在していたが、これは受験者数や文化レベルに応じて地域的不均衡が予め設定されていた。そのため、本貫を偽った不正受験が多発する原因ともなっており、そこから本貫取解規定は解試制度の根本に関わるものとなる。そしてこの本貫取解規定については空文であったという観点があるためか、先行研究でも制度の概括に留まってしまっており、依然としてさらに踏みこんだ検討、特にその解額との関係から考察する余地が残されている。

そして本報告が扱った十一世紀前半とは宋代の三度にわたる科挙・学制改革の一度目の時代でもある。この改革はすぐに失敗に終わったためか先行研究でも理念のみしか評価されていない。だが北宋のその後の科挙改革の結果、全国的に士人層の激増が見られるようになる。では、この十一世紀前半はその後の科挙社会の形成にどのように関わっているのだろうか。

本報告では以上のような観点から、十一世紀前半の解試、それを成り立たせていた本貫取解規定の変遷を見ていくこととした。その考察の結果、分かったことは以下の通りである。

宋朝政府はその成立当初より規定の徹底を指示するものの、特に天聖七年のそれは不正受験を行った者に対して再度の受験を認めな

いなどという徹底したものであった。ただしこれは決して単なる嚴罰化のみを意味するのではなく、これと同時に、受験生に本貫に帰れさせれば今までの不正受験の経歴を認め、将来的には解試免除を行うなどの優遇策も採っていた。また、さらには地方での解額数の調整、全体的には大幅な増額を指示してもおり、これらにより宋朝政府は不正受験者が多数存在していた開封府から地方への受験者誘導を行っていたと思われる。

つづいて改革が行われた慶暦四年に於いては、科挙受験には予め本貫の学校での一定期間の在学が必須となったのであるが、これにともない規定の再確認も行われている。この時にはさらに解試ではじめて連保制度が導入されるなど、規定の嚴格化が進んだと思われるが、やはり同時に全国的に解額数の増額が行われている。

そして嘉祐二年になり、それまでの三、四年ごとの科挙を隔年実施に改めることとなった。これは受験者たちが少しでも合格しやすい地、開封府に規定を無視して長期滞在していたことが問題視されたことが一因であった。そこで隔年開催となると同時に規定の再確認が行われたのであるが、注目するべきは次回科挙となった嘉祐四年科挙の後になって、受験者が故郷に帰ったので解額数を増やす、という史料があることである。また、これと同時に彼らの帰郷によって地方学生数が増加しているという史料も存在していた。ここから、規定の徹底化という措置が一定の成果を挙げたことが分かる。

以上の検討から、宋朝政府は規定の徹底とそれにもなう非本貫

地に滞在していた受験者への利益誘導を行い、それは受験者の帰郷、そこからの受験者の特定地域、具体的には開封府からの地域的広範化へとつながったことが想像される。また、そこからこの十一世紀前半という時期は、同世紀後半以降になって本格化していく各地域の科挙社会形成の起点であったと言うこともできると思われる。

サファイ・アッディーンのイーカー論とアラブ詩の韻律

木村 伸子

伝統的アラブ音楽のイーカーとは、低音と高音の組み合わせによる様々なリズムパターンであるとされている。一九三二年にエジプトで開催された第一回カイロ音楽会議では、当時の中東各地で使用されていた数百種類におよぶリズムパターンが確認され、採譜された。それらのリズムパターンが、現在における伝統的アラブ音楽のイーカーの基礎とされている。

一方で、九世紀から十三世紀にかけてアラブ音楽に関する著作がいくつも残されているが、それら中世のアラブ音楽理論書に記されたイーカーのパターンは、先行研究によると、どの著作においてもせいぜい十種類程度しか確認されておらず、また近代以降のリズムパターンとは名前も形もまるで異なっているように思われる。その